

# 越境人

2011 SUMMER vol.4

コリア国際学園 広報誌

特集1  
対談

厳敵俊 VS 秋田光彦

## 東日本大震災が問いかける 生き方と教育とは

### 特集2 第1回卒業式と第1期生の進路実績

#### ■ 特別授業 文化、歴史を越えた組織形成

祖母井秀隆さん（京都サンガFC ゼネラルマネージャー）



2 特集1・対談 厳徹俊 vs 秋田光彦  
東日本大震災が問いかける  
生き方と教育とは

8 特集2 第1回卒業式と第1期生の進路実績  
10 特別授業 文化、歴史を越えた組織形成  
—サッカーチームはどうやって  
言語や文化、歴史を乗り越えて組織を作るのか—  
祖母井秀隆さん（京都サンガFC ゼネラルマネージャー）



越境人 2011年夏 第4号

・発行日 2011年6月17日  
・発行 コリア国際学園  
〒567-0057 大阪府茨木市豊川2丁目13番35号  
TEL:072-643-4200 FAX:072-643-4401  
E-mail:contact-school@kis-korea.org http://www.kis-korea.org/

※越境人は年2回の発行です。※本誌記事を無断で転載等する事を禁じます。

## 12 NEWS REPORT

韓国短期研修  
第4回入学式／春の遠足  
春季日本研修旅行／学生会選挙

## 16 Activity Report

教養・Liberal Arts科 授業訪問記④  
KISクラブ活動 訪問記 <サッカー部>

**速報!** 大阪駅前第1ビル5階に  
大阪支店(仮称)今夏開設予定!  
土地・建物・  
マンション等々  
**売却依頼募集中!**

自由設計  
お好きな建築プランでお建てください。  
女性設計士と建てる家



イルソーレシリーズ好評分譲中!

(社)全日本不動産協会会員 (社)不動産保証協会会員 (社)近畿地区不動産公正取引協議会加盟 ■宅建免許／奈良県知事(2)3522号 ■建設業免許／奈良県知事(般-19)14196号  
分譲・仲介・新築・リフォーム・賃貸

株式会社  
**山崎ハウジング**

<http://www.yamazakihousing.com>

※検索ワードは下記でクリック  
山崎ハウジング 検索



MISAWA International  
200年住宅 HABITA  
ネットすまい  
エスマイエル 売壳専門店  
本社 奈良県吉野郡大淀町北野137番地の20  
TEL : 0746-34-5688  
橿原店 奈良県橿原市内膳町5丁目6番29号(サンリブキャトル1F)  
TEL : 0744-21-7577

デザイン:尹 浩子

## 建学の精神

境界をまたぐ「越境人」に。

21世紀の国際社会は、グローバル化と情報化が加速する一方で、政治・経済・社会・文化のあらゆる面において、解決すべき人類共通の課題にも直面しています。とりわけ東アジアは、その集約的な地域のひとつとしてダイナミックな変化が予見される歴史的な転換期にあります。

こうした時代状況を未来に向けて切り拓いていくためには、なにより個性と多様性の尊重を基礎とした創造力の溢れる人間が求められています。言い換えれば、柔軟な発想と幅広いコミュニケーション能力を兼ね備え、問題解決能力に優れた人間の育成にほかなりません。

コリア国際学園（KIS）は、在日コリアンをはじめとする多様な文化的背景を持つ生徒たちが、自らのアイデンティティについて自由に考え学ぶことができ、かつ確かな学力と豊かな個性を持った創造的人間として複数の国家・境界をまたぎ活躍できる、いわば「越境人」の育成を目指します。

コリア国際学園（KIS）は、すべての教育活動を通じて相互の信頼と協同を深め、地域社会に根ざし、コリアにつながり、世界に開かれた国際学校として、世界と東アジアの持続可能な発展に貢献します。

## 教育理念

## 多文化共生

民族的アイデンティティと自尊感情を育むとともに、多文化共生社会の実現に向けた知識、技能、態度を身につけた人間を育成する。

## 人権と平和

人間の尊厳と民主主義を尊重し、世界平和を希求する普遍的価値を創造するとともに、地球的視野を持ち、持続可能な社会の構築に貢献できる人間を育成する。

## 自由と創造

真の自由を理解し、豊かな個性と多様性を基礎とした創造力の溢れる人間を育成する。

## ◆ 校章・シンボルマーク ◆



目であり  
宇宙であり  
太陽であり地球であり  
そして みつめていて、考えていて  
そして いつも ゆれている

## ◆ デザイン・文 ◆

黒田 征太郎 Seitaro Kuroda  
(イラストレーター)

くろだ・せいたろう ● 1939年大阪府生まれ。  
'92年にNew Yorkへ移住。イラストレーターとしてポスターなど幅広いアーティスト活動を展開。  
コリア国際学園の発起人のひとり。

## ◆ コメント ◆

色は 中心が 赤 (火) (光)  
その外が 黄 (アジア)  
その外が 草色 (地)  
その外が 青 (天であり水)  
としました

# 東日本大震災

**厳 敏俊** オム・チャンジュン  
(コリア国際学園中等部・高等部校長)

**秋田光彦**

(浄土宗大蓮寺住職・應典院代表/パドマ幼稚園園長)



## が問いかける 生き方と教育とは

今年3月11日、未曾有の大地震が東北地方を直撃しました。それに続く大津波と原発事故をくわえた甚大な被害を前に、悲嘆、混乱、希望、勇気が入り混じりながら、日本社会はかつてない危機に直面しています。私たちは、今どのようないい時代の転換点に立たされているのでしょうか。大阪・大蓮寺の住職であり、パドマ幼稚園の秋田光彦園長と本学園の嚴敏俊校長に、これまでの人生経験を振り返りながら3.11後の生き方と教育について素直に語っていただきました。

(座談日: 2011年5月11日)

**秋田** 今日対談しているこの場所は、460年以上続いた淨土宗大蓮寺の塔頭である應典院と言いまして、1997年に建物ごと新しく新築したお寺です。設計段階からいろいろ考えるところがあり、「開かれたお寺」として一キヤツチフレーズは、「呼吸するお寺」ですが、当初から構想していました。

私自身は、大学時代から映画の制作にめり込み、20代の時には「鬼才」と呼ばれた時もありましたが(笑)、結局は多くの方に迷惑をかける形で失敗した出戻り坊主です。30歳を過ぎたころから、当時の日本の仏教界に絶望して、国際協力のNGO活動に従事していました。タイやビルマ、台湾のようなアジアの仏教国の僧侶たちの中に、NGOと一緒に協働しながら社会参加している動きがありました。当時そういう仏教と社会の関係のあり方に大きな影響を受けましたね。

日本に帰ってくると、日本は相変わらずでした。特に、大阪の繁華街ミナミに近いこのあたりは、まだバブル経済の残り火がある時期で、お寺の地上げとか、お寺自身が再開発に関わるとか、いわ

ば「坪なんぼ」の俗の現実があつたわけです。これまで暗黙の了解としてあつた「お寺は聖地である」「先祖代々の歴史」云々と言つた内実をもう一度説き直していく説明責任が寺に求められています。單にここにあるから、これからも何百年もここにあり続けるというのではなく、何故この時代に、この地に、この寺が存在するのか、同時に寺とは一体何をするところなのか、という根本的な問いに搖さぶれた時期でした。

それに追い打ちをかけたのが、95年の阪神淡路大震災とオウム真理教の事件でした。端的に言うと、この2つの事件は既存の宗教のシステム、例えば教義とか儀礼とかが現場では全く通用しなかつたのです。それどころか従来の宗教のあり方そのものが瓦解したといつてもいい。今回の東日本大震災とは様子が少し違うかもしれませんが、少なくとも阪神淡路大震災の時は、宗教的なものは法度でした。仮に、私たちが、そこで仏教の話をしようとしても、あのような激烈な状況の中では、何の効力も發揮しない、そういう無力感があつたわけです。

その後に地下鉄サリン事件が起きます。多くの非常に明晰な若者たちがオウム真理教に吸い寄せられていきました。後で脱会した一人の若者がインタビューにこう答えています。「なぜ貴方は、オウムではなく数多くある日本の仏教寺院の門をたたかなかつたのか、そこでも宗教的な教えを求められたのではないか」という問い合わせに対して、その元信者は「お寺は、宗教ではなく自分には單なる風景にしかなかった」という言葉を残しています。社会を生きていく上で、「ちえ」としての仏教、あるいはお寺という場所が、人の心にいつこうに響いてこない。そのことに対する自分なりの答えを探すがごとく、97年にこの寺をはじめたのです。

日本がまだ近代国家に入る以前、地域ごとのオ

リジナリティが残っていた時代には、お寺は「学び」と「癒し」と「楽しみ」、言い換えれば教育

と福祉と芸術・文化という公益的な役割を担つ

きたはずです。こうした公益を役所に全部お任せするのではなくて、どのように市民の場としてお寺に取り戻していくのか。95年以降に市民協働と

お寺は「学び」と「癒し」と「楽しみ」、言い換えれば教育と福祉と芸術・文化という公益的な役割を担つてきたはずです。(秋田)

## これまでの日本社会の経済優先の価値観や社会の仕組みの根本的な見直しが迫られているのではないでしようか。（嚴）

としてそれが、日本の共同体をつないできた、という面もある。



お寺の話で重ねると、例えば仏教だけでも200以上の宗派があり、全国7万6千の寺院の地域性を担保しています。僧侶自身も、生計のためという事情もあるが、教師や公務員などいろいろな仕事を兼職していて、多彩に活躍をしています。そもそも僧侶が肉食妻帯するという独自のス

言うのですね。韓国には、そういう情熱が、まだ生きている。ただ日本人からみると、どつか危うい、正義を簡単に言えるのかと思ってしまいました」と語っていました。私は逆に「何で日本人は正義を語らないのか」というショックもあったのです。やはり社会の中核グループが、社会的な問題が起きた時に、どう対応するのかはとても重要なことです。日本社会ではこうした面が、戦後民主主義の中でも相当衰退していったのではないかと感じます。

秋田 日本人が、確たる答えを表明しない曖昧さというのは、以前から指摘されてきました。論理性が弱いとも言われています。むろん、改めるべきところもあるのですが、日本人のメンタリティです。

の経済優先の価値観や社会の仕組みの根本的な見直しが迫られているのではないでしようか。地震と津波による被害は、「想定外」の地震に対応した防災計画を想定できなかつた人災の側面もありますが、根本原因は自然災害です。ところが原発問題は、質が全然違います。これはまったく人災ですよね。

先ほどの話とつながるのですが、今回の原発事故の問題で、なぜ日本社会は、もつと怒らないのか。どうして政府や東京電力への批判の声をもつとあげないのか、その点は強い違和感を覚えます。やはり韓国やヨーロッパから見ると、分かりづらいですよ。

秋田 私は幼稚園の園長も務めていますが、仏教の幼児教育でいちばん重要なものは、畏敬の念を育てることだと伝えています。大きなものを畏れ敬う心。つまり、自分の小ささを、思い知るということですね。知識や技術があれば不可能はない」と、「個」がどんどん肥大していく。畏敬が失われたあと、傲慢で尊大な日本人像ができるがつてしまつた。それを私のレベルから相対化しながら、調整していく必要があるんだと思います。

今回の原発問題の背後にある考え方とは、高度の知識や技術があれば自然の脅威に対処できるという考え方ですね。そこに大きな思い上がりがあった。「自然に優しく」と言う言葉 자체が、実

染み込んだ上俗のような風景ですね。今回の被災地でも、東北のお寺は、まず遺体安置所になり、避難所になり、物資拠点やボランティア拠点にもなっている。状況に即応しながら、自在に姿を変えていく。もちろん曖昧だから無責任ではないのですが、曖昧ゆえ、糊代が大きく、いろいろな選択ができる、という利点もあるでしょう。

嚴 僕は韓国人ですので、すばり物を言うスタイルからしてそうですね。ひとつのものに拘泥されない。いろいろな価値観や生き方を、多様なまま受け入れていく。そういう受容力とか寛容力は、逆にいうと曖昧さの中に潜んだ日本仏教の特性ではないかと思うのです。

だから、さきほど「寺は風景」というのは、2つの意味があるのです。まつたく機能しない凍てついた風景と、もうひとつ私たちの生活風土に大きな川に架かった橋も崩壊したり、あるいは漢江という大きな川に架かった橋も崩壊したりしました。それまで韓国は開発至上主義、経済成長一辺倒でやってきて、先進国の仲間入りを果たすことを國家目標にしてきました。60年代からの30年間の全ての努力は、確かに経済的な豊かさは進んだかもしれないが、あの崩壊した百貨店や大橋で見せた無残な光景は、それまで韓国社会が追い求めてきた価値観の崩壊を象徴的に見せつけてくれたのです。

今回の東日本大地震でも、これまでの日本社会



多神教であり、仏教もその一つとして日本人に受容されたのだと思います。

ですから、私は日本人の曖昧さというものに対して、必ずしも否定もしていませんし、絶望もしていません。逆に、正義があると言いつつも、ことにも、やや危険性を感じるのです。

一方で、日本の個人主義が利己主義、私益主義に陥りやすいのは、そういう曖昧さの悪い面があります。日本は天変地異も多いし、四季もあります。それは長い歴史や風土の中から育まってきたものであって、日本社会には近代ヨーロッパとは違ふん違う人生観や世界観があると思います。

砂漠の宗教、森の宗教と対照的に言われます。歴史上、砂漠の過酷な自然環境と打ち勝っていくためには、峻烈な思想が求められ、それがキリスト教やイスラム教といった一神教を生んだ。イス・オア・ノーの文明ですね。それに対し、芳醇な森の文化圏には、さまざまな生物が互いに恵みあい共生している。そこには、多様性を受け入れる森の思想というものが生まれる。森の宗教とは



根本的に見つめ直してみるべき。秋田

避けがたき悲嘆、喪失といふものに寄り添いながら、人間の絆を取り戻すことができないだろうか。（秋田）

ではないのかと思います。

私は東日本大震災をどう受け止めるべきかという時に、近代が今まで持っていた、何でも成長していけばよい、何でも発展していくべきよいう考え方を、一回根本的に見つめ直してみるべきではないかと思うのです。ですから、実は教育そのものも、再構築しなければならないと思うわけです。近代教育というのは、成長や発展に寄与していかねばならないと、ある種ずっと「洗脳」させてきたわけですから。それがダメだ、と言われた時に、我々はまだ幼稚教育だから良いのですが（笑）、むしろ中高生を対象とするKISの場合は、学びの方があく深く変わつていかざるをえないと思いますし、そこにこそKISの持つている一つの大きな可能性があると思います。

**厳** KISは、国連のユネスコスクールへの加盟を申請しています。たぶん、今年度中には加盟が認められると思います。ユネスコスクールは国連のユネスコ（国連教育科学文化機関）憲章の理念を学校現場に具現化するために発足した学校の国際的なネットワークです。

ユネスコスクールは、将来にわたる持続可能な社会の実現のために環境、人権、平和などの課題をホリスティックな視点から考え、立ち向かい解決するための力を育成する持続発展教育（ESD.. Education of Sustainable Development）の推進

校として位置付けられています。今は、世界で8500校、日本国内でも200校以上あります。

KISの建学の精神は「境界をまたぐ越境人」の育成です。越境人とは、人類共通の諸課題を解決していくために、時空や属性や価値観などの違いを越えてつながり合うことができる資質や能力を持ち、持続可能な社会の構築に向けて参加・行動する人間のことであります。KISの理念とユネスコスクールの理念とは重なり合います。今後は、KIS独自の教養・Liberal Arts科授業や体験学習の授業、韓国等の海外研修プログラムを組み合わせながら、着実に教育の内実を深めていきたいと考えています。

**秋田** なるほど興味深い話ですね。先ほど、私が申し上げた近代の成長や発展の価値観に代わる価値観を創造していく上で、感情や感性は重要です。例え、このたびの大震災では多くの方々が亡くなられましたが、悲嘆、喪失あるいは死者—死者は究極の他者だと思うのですが—こういったことを考えないようにしようとしてきたのが、これまでの日本の社会システムでした。私たちは、今回の大震災を経験して、実はもう一度、そういう避けがたき悲嘆、喪失というものに寄り添いながら、人間の絆を取り戻すことができないだろうかと考えています。

超高齢化が加速して、日本社会は大変な多死社会

## 創造性は、同質性の中からではなく、異質な他者との違和感や葛藤の中から生まれるもの。（厳）

会に入っています。孤独死はますます増えるでしょう。一方で今の若者は雇用と働く希望を失っています。私たちの時代は、会社に入れば終身雇用でしたが、今の日本社会には、担保された未来がない、安定した未来がない。そうした中で、若者が悲嘆し生きる意味を喪失している現状をたくさん見ていています。今回の大地震を通して、教育と社会的セーフティネットと心のケアが必要であると思うのです。

**厳** 自分の中でも昨日の自分と明日の自分とは違うものです。多様な他者の関係性を知り、相互依存的な存在として全体が成り立っていることを理解することが重要だと思います。基礎的な知識は必要ですが、単なる物知りに終わるのでなく、自身でぶつかったり考えたりしながら、他者との経験を通じて獲得する知識や経験則こそがとても

意味のあることです。

KISでは、今年から韓国からの留学生を受け入れていますが、やはり日本で生活してきた生徒らと文化的な背景の違いから、さまざまな葛藤や擦れ違いが起こるのです。こうした課題に学校が不安がるのではなく、多様性の中で生徒も学校も成長するのだと信じることだと思います。創造性は、同質性の中からではなく、異質な他者との違和感や葛藤の中から生まれるものだからです。

KISでは、異質的な他者と一緒に学びあうことの大切さを尊重したい。

人は行動をする時、何らかの行動規準をもつています。これは利益か損することか、常識的か非常識的か。私たちは日常生活でこの利益か常識的か、あるいは好きか嫌いかというところまで自分の判断基準とするのが普通ではないでしょうか

か。しかし、自らを越境人だと宣言したKISの生徒たちは、正義か不正義かの問題も自分の基準としてしっかりと受け止めてほしい。場合によっては、損することがあつても、非常識に見られ誤解を受けることがあります。たとえ個人的には好きなことでも、内面の深いところから聞こえてくる良心の声に耳を傾けなければなりません。

利益と常識的判断によつてのみ生きれば、概ねトラブルを起こすことはありません。山あり谷ありの人生を無難に、「平和」に生き抜くことができるかもしれません。ただし、そこに不正義があるにもかかわらず、何もしないで、ただ丸く、穩便に、というふうに見過ごす態度は、平和に見えるかも知れませんが、決して平和と同義語ではありません。KISで学んだ生徒たちには、越境人として複雑な利害や思いを調整し、平和を創り出すピースメーカーになつてしまいと願っています。



應典院

應典院入り口の全景

應典院の2階からのぞむ大蓮寺の墓地の風景

### Profile

あきた・みひこ ● 1955年大阪市生まれ。大学卒業後、映画プロデューサー兼脚本家として「アイコ16歳」などを発表。その後、劇場寺院應典院を拠点として仏教、アート、まちづくり、コミュニティケアなど、「協働」と「対話」の新しい地域教育にかかわる。相愛大学人文学部客員教授。著書に「葬式をしない寺—大阪・應典院の挑戦」(新潮新書)など。

おむ・ちゃんじゅん ● 1962年、韓国金堤市に生まれる。ソウル育ち。韓国外国语大学日本語科、同アジア地域研究科、国際関係研究科修了。1992年、文部省の国費留学生として立命館大学に留学。同法学研究科博士後期課程満期退学。同国際関係学部常勤講師等を経て現職。現在、在日大韓基督教會京都教會長老。